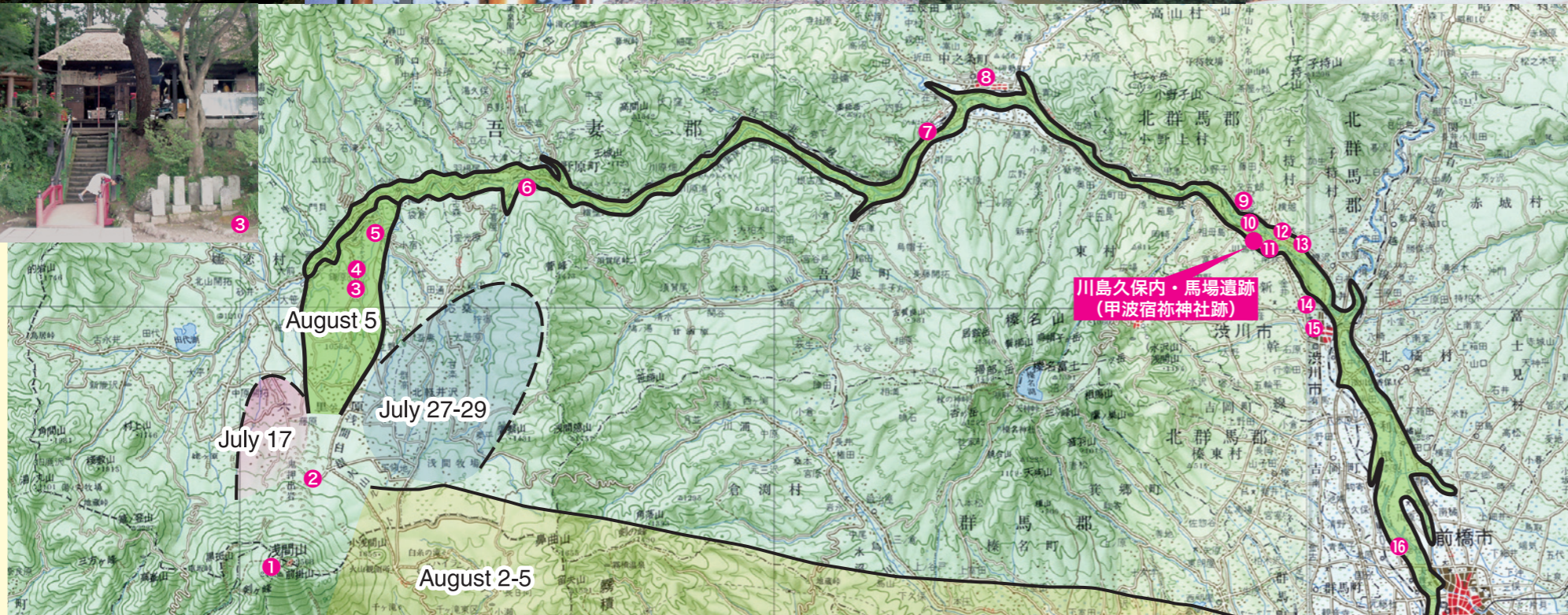


災害マップ 「天明三年を歩く」

1783 —天明3年8月5日・土石なだれと泥流の爪痕—

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『遺跡は今』5号 1997、
関 2006 を加除編集。
市町村名は、平成の大合併以前。



1 浅間山
標高2568m。複成層型の代表的活火山。数個の火山体から構成され、前掛山が最も新しい火山体。有史以降の記録で見てもかなりの数の噴火が確認できます。残された降下軽石堆積物は明らかに識別可能なものが約10枚あり、その最上部3層は特徴的で上から下に浅間A、B、C層と呼ばれ、噴火年代は1783年、1108年、4世紀頃とされています。
現在では、噴火警戒レベルに応じて規制範囲が定められています。最近の100年間は、50回以上の噴火を繰り返しており、最近では2004年に中噴火をしています。

2 町営浅間山博物館・嬬恋村鎌原
浅間山に関する地質や災害についての記録などが展示されており、火口に設置されたビデオカメラからの映像をライブで見ることが出来ます。溶岩の洞窟をイメージした「地底マジカルホール」、地球の鼓動が聞こえる「ロストワールド」など、設置も盛りだくさんです。

3 鎌原観音堂・嬬恋村鎌原
天明3年8月5日に浅間山火口から流出した火砕流と発生した土石なだれが鎌原村を襲いました。一瞬にして窪地の村落が押し潰され、477人の命が奪い去られました。生き残った93人は近くの村々の暖かい援助と団結力で埋めつくされた村を再建してきたのです。昭和54年に始まった発掘調査の様子は広く報道され、人々の心を大きく揺り動かししました。観音堂には477人の戒名を刻む三十三回忌供養塔や二百回忌供養観音像があります。周辺には、流された延命寺の標石やその一部で村の道しるべとなった標石、郷倉(凶作に備える共同の穀倉)などがあります。

4 嬬恋郷土資料館・嬬恋村鎌原
天明の浅間山大噴火によって埋没した鎌原村の悲劇の歴史を、発掘された出土品の展示や映像を通して理解することができます。発掘された延命寺跡や旧鎌原村の集落の出土品が、当時の様子を語りかけてきます。鎌原観音堂近く、浅間・白根火山ルート沿いにあります。

5 常林寺・長野原町広葉
1528年に創建されたといわれています。天明3年の噴火に伴う土石なだれによって諸堂宇を流失。文政年間に現在の地に再建されました。被災時に流失した梵鐘は、明治43年に長野原町川原畑で見えられ、128年ぶりに寺に戻りました。現在は、浅間火山博物館に展示されています。

6 旧新井村・長野原町与喜屋
熊川を逆流した泥流によって埋まったともいわれる新井村は、戸数6軒の小さな村でした。その家屋や耕地はことごとく流されました。被災後も存続しましたが、明治8年に廃村となり人々の記憶から新井村は消えていきました。現在の長野原町総合グラウンド付近に位置したといわれています。現在も、高台には「逆水寛流信女」と戒名の刻まれた墓標があります。

7 善導寺門前供養塔・吾妻町原町
市街地の旧国道沿いの善導寺山門入口の両側にあります。同寺(浄土宗)の発祥で天明8年(六回忌)、文化2年(二十三回忌)、文化12年(三十三回忌)、天保3年(五十回忌)、昭和7年(百五十回忌)と5度にわたり供養し立派な供養塔を建立しています。各史料による被害状況をもとに原町では死者が出ていません。それにもかかわらず、これほど後世まで供養し、その碑を建てた例は他にみられません。

8 林昌寺門前供養塔・中之条町伊勢町
噴火百年供養記念碑と二百年記念碑が、参道に向かい合って建てられています。いずれも立派な塔で、「天明の災禍を忘れることなく歴史の教訓を肝に銘じ郷土の弥栄を願う。」と結んでいます。

9 木の間の供養塔・小野上村小野子
国道353号沿いの小野子バス停北、飯塚大学の石堂という案内の立つ墓内地にあります。高さ104cm、安山岩の自然石に「流死萬霊等」と刻まれており、現在の吾妻川の流れを眼下に一望することのできる高台に建てられています。この辺りから、吾妻川は両岸が開かれた地形となっています。

10 金島の浅間石・渋川市川島
県指定天然記念物。天明泥流により吾妻川を伝い、この地まで運ばれてきました。高さ4m、東西15m、南北10mの巨岩です。このように流れによって運ばれた岩を流水岩ともいいます。同様なものが、中之条町青山、東村新巻、渋川市中村などにもみられます。

11 流死者供養石仏・渋川市川島
飯塚氏共同霊園の隣地にあります。泥流により運ばれた浅間石の上に多数の石仏が祀られています。十王・地藏・奪衣婆などで、天明3年の泥流により流死した川嶋村113名の供養のために渋川・金井・南牧・祖母島の奇特者が造立したといわれています。

12 興福寺入口販賃感恩の碑・子持村北牧
天明3年の浅間災害の後、46年目の文政12年(1829)の建立です。泥流の被害状況と幕府勘定吟味役根岸九郎左衛門の巡察状況を記し、当を得た救済処置で被災から復興した恩恵が忘れられないよう、佃村の福増寺の金峰和尚の提案で北牧村の古老たちが建てた碑と記されており、江戸時代の民政を知る上でも貴重な資料といわれています。

13 人助けの樞の木と供養碑・子持村北牧
北牧村では泥流によって53名の死者が出たと記録され、その際この樞の木に登って数十人が難を逃れたと伝えられています。樹齢は400年を越え、当時の樹勢は見られませんが、天明3年の災害を伝える生き証人として国道353号沿いにたえず立っています。地元では、実と葉の臭いから「へだまの木」とユーモラスな呼ばれ方もしています。

14 流死者墓・渋川市金井
高さ45cm、幅35cm。浅間石の自然石に「流死墓」と刻まれています。渋川北中学校の東、「金井住民センター入口」の看板を北に入った住宅の入口にあり、被災にあった無縁仏と伝えられています。

15 真光寺入口供養塔・渋川市並木町
碑身は自然石の台石の上に建てられています。高さ総丈130cm、地元の人々によって建立されたもので、梵字に続けて「流死萬霊墓」と刻まれています。

16 元景寺境内供養塔・前橋市総社町
惣社村の人々は上流から押し流された被災者を引き上げ勝山地区内に合葬し、翌年霊を弔うためにこの供養塔を建てました。後年、利根川の決壊による流失の危険から、この供養塔は元景寺境内の現在地に移されました。塔の裏に当時の惨状と建立の理由が刻まれています。

17 天明地蔵碑・伊勢崎市戸谷塚
被災による戸谷塚村の死者は記録の上では確認されていませんが、付近の利根川岸に当時は700人あまりの遺体が流れ着いたといわれています。翌天明4年、戸谷塚の人々の手で建てられた供養地蔵碑です。昭和37年に嬬恋村と長野原町の手で建立された供養碑も並んでおり、今でも毎年、天明三年被災者供養の念仏和讃を誦え、菩提を弔っています。

18 八斗島の供養碑・伊勢崎市八斗島
利根川沿いの八斗島の共同墓地の入口にあり、頂部が四角錐、高さ76cmの四角柱の供養塔です。左右の側面にそれぞれ2字の戒名で、男性31人、女性8人の戒名が刻まれています。碑身は自然石の台石の上に建てられています。高さ総丈130cm、地元の人々によって建立されたもので、梵字に続けて「流死萬霊墓」と刻まれています。

19 旧中島村薬師堂境内供養塔・境町中島
記録によれば、泥流災害時に中島村の人々は、流れ着いた男女36人の遺体を拾い上げ、この墓地に葬ったといわれています。村中で建立したというこの供養塔には「流死霊魂位」と刻まれ、境南中学校の100m程西よりの薬師堂内に建てられています。

20 円福寺門前供養塔・千代田町舞木
利根川左岸堤防沿いの円福寺の入口にあります。この付近では、泥流により500間の堤防が破れ、田が5尺も高くなったという記録が残っています。泥流の堆積は、この地区の後の大洪水による破壊の発生に大きく影響を与えました。付近の畑の隅にはこの泥流によって運ばれた浅間石が今も点在しています。泥流に被災した人々に対する利根川流域の本県分最下流の供養塔とされています。浅間山火口からの流下距離は約130km。



●さらに、泥流は千葉県関宿で、鏡子へ向かう一方、江戸川(旧利根川)に入り東京湾へも流れ込みました。その際に運ばれた遺体が手厚く葬られたことが伝えられ、江戸川区東小岩・善養寺、葛飾区柴又・題経寺、江戸川区東小松川・善照寺などに当時の被災と隣人愛を今に伝える供養塔が残されています。